



「子どもたちを被害者にも加害者にもしないために」 中編

令和五年十月二十四日に、倉敷市青少年を育てる会指導者・倉敷市少年補導委員合同研修会で実施した講演会の要旨を三回に分けてお届けします。講師は、おかやま犯罪被害者サポートファミリーズ 理事の市原千代子（いちばら・ちよこ）先生です。

●見え始めていた夢や希望

資格を取りたい、もう一度高校生活を送りたいと言っていたところへ、休学していた高校から連絡があり、私と圭司と先生で話し合いました。圭司は、「資格の取れる高校でやり直したい」と言い、岡山市の学校の資料を取り寄せて調べ、「この学校でやり直したい」と言いました。八月に三期の募集が残っていることがわかり、先生と相談して、今の高校は中退して、三期募集に向けて頑張ることに決めました。

やっと圭司の中で、夢や希望、未来が少し見え始めていました。でもその一方で、圭司に芽生えている気持ちを感じていました。それは、二年近く、きちんと学校に行かず、生活ができていなかったことから来る負い目、引け目でした。それは、家族に

も近所や世間の人たちに対してもありませんでした。そして、当時は、学校に行っていない子や、中退して働いている子どもたちと関わることも多くなっており、その中に加害者の三人がいました。加害者Aは、高校一年生の時に学校を中退し、父親が経営する建設会社で働いていました。加害者Bは、圭司と同じ高校でしたが、ひどい暴力の被害に遭い続けて学校に行けなくなり、高校中退して、Aの父の会社で働いていました。加害者Cは、事件当時、高校の卒業式を終えていました。正式には四月からですが、卒業式を終えた時点で、Aの父の会社で働いていたようです。だから、ABCの三人は、一緒にいることが多くなっていました。

●事件の日

事件の日、三月十七日のことを話します。

一番下の娘の中学校の卒業式の日でした。圭司は、「僕は遊びに行ってくるからよろしく」と出かけて行きました。私は娘の卒業式の後には家にいました。夕方に圭司が帰ってきました。当時圭司は、周りの人に対する負い目、引け目を感じていましたが、私の近くに一緒にいてくれることが多く、たくさん話もしてくれました。でも、夫や娘には少し関わりづらくなっている、食事は時間をずらしてとることが多くなっていました。そのときも「お腹が空いた」と言うので、急いで食べさせました。

食が終わると圭司は、「腰が痛いし、しんどいから寝るわ」と寝に行きました。一か月ほど前に扁桃腺の手術もあり、体調も思わしくないことを知っており、寝かせておいてやりたいと思いました。

●病院の夜

夜になり、Cから電話がかかってきました。「圭司いる？」という電話でした。寝かせておいてやりたかったのに、何度が電話がかかってくるたびに、「寝てるから」と断りました。電話がなくなり、私は九時すぎにお風呂に入りました。その間に再度Cから電話があり、娘が取って、圭司に代わりました。その電話で呼び出され、出て行った圭司は、最初に話したように、「電話に出なかった」とか、「日頃の態度が横柄だ、生意気だ」という因縁をつけられながら、殴る、蹴る、川に蹴り込まれるなどの暴行を受けました。私は、裁判で暴行の実態を全て聞こうとしたのですが、余りに辛くて聞くことができませんでした。わずか三十分で、圭司は動かなくなりました。彼らは「どうしよう」と相談して、隣の病院に運び込み、十時半過ぎに再度、Cから電話があり、「おばちゃん、先輩が川へ圭司を放り込んだんじゃ。目を開けんのだけどこよ」と来ちゃって」と言いました。主人は家にいましたが、頭が痛いし先に休んでいました。私は、圭司がそんなひどいけがをしていると思っていませんでした。だから娘に、「病院にいるようだから迎えに行ってくる」と伝え、川に放り込まれたと聞いていたので、着替えをつかんで病院に向かいました。





倉敷市立南中学校 3年 河内泰史 (令和4年度)

「海」(切り絵)

細い部分は間違っって切ってしまうないように、特に慎重にカッターナイフを動かしました。

たりすることを繰り返しながら朝を迎えました。

夜が明け、当直の先生から、心臓が一時危険な状態になったこと、きつい薬で様子を見ているが、使い続けると心臓に負担がかかることを告げられました。でも亡くなるとは思っていませんでした。だから、長男が帰るまで何とかして欲しいとお願いしました。

「市原さん、圭司くんはとても重篤な状態です。この後は集中治療室、ICUに入って経過を見ようと思います」と言われました。私はこのとき、子どもたちに来て欲しいと思いましたが、深夜で電話できませんでした。長男だけに連絡し、事情を話し、帰ってきて欲しいと頼みました。

そのあと私たちは、家族が待機する部屋で夜を明かしました。本当に長い夜でした。涙がいっぱい溢れてきて、離れている間に圭司に何かあったらどうしようという思いとともに、早く朝になり、元気な顔や姿が見たいという思いが行ったり来たりしました。じつとしていられず、ICUのある六階から一階までの階段も何度も何度も上がったたり下りたりする一方、何かあったらどうしようと、また待機する部屋に戻

続けることができず、足をさすりながら付き添いました。一時半に長男が病院に着き、急いで六階のICUまで階段を駆け上がりました。その直後の一時三九分に圭司は息を引き取りました。

●生きていること、死んでしまうこと

その後、病院の先生から、「警察が来るので外で待っていてください」と言われ、外に出ました。すると、Y君が外に来てくれて、いることがわかりました。急いで一緒に圭司のところに行き、二人で体に触れました。まだぬくもりが残っていました。「おかしいね、こんな温かいのに息をしてない。どうしてなんだろう。こんなに温かいのに目を開けてくれない、しゃべってくれない。どうしてなんだろう」と言う言いながら圭司に会ってもらいました。Y君は、目から大粒の涙をこぼし、名前を呼んで最後のお別れをしてくれました。

動いていますよね。

私は、手を合わせて温かかったり、握たり握り返したりできること、それが生きていることだと思えます。死んでしまうということは、その温かかった手が、氷のように冷たく動かなくなってしまうことです。そして、氷のように冷たく動かない手も、最終的にはなくなってしまうということなんです。どんなに想像力を働かせても、亡くなった時の傷だらけの顔から後の顔を想像することができません。生きていれば、圭司は今年四十三歳です。でも、どんなに頑張っても、四十三歳になる顔を想像することができません。それが死んでしまうことだと思えます。

(後編へ続く)